

むかし、あるお殿とのさまに、美しいお姫ひめさまがありました。やがて、お姫さまの母親が亡なくなつて、新しい母親が来ました。この母親は、日ひごろからお姫さまを嫌きらつて、なんとかしてお姫さまを亡なき者にしたいと思つていました。

ある日、お殿さまが遠くへ出かけた留守るすに、母親は、家来けらいを呼んでいいました。

「姫を鷹たかの山へ連れていって、捨てておいで」

お姫さまは、鷹の山に連れていかれて、ひとり座すわっていました。やがて、鷹が飛んできて、お姫さまをさらつていこうとしました。けれども、お姫さまがあまりに清らかな様子なので、鷹は、

「おまえのようなきれいなお姫さまを、おれはどうすることもできない。さあ、御殿へ帰れ」といって、お姫さまを羽はにくるんで空へ舞まい上がり、御殿に連れもどしました。

母親は悔くやしがりました。そして七日たつとまた家来を呼んでいいました。

「姫をいのししの山に連れていって、捨てておいで」

お姫さまは、こんどはいのししの山に連れていかれました。ひとり座すわっていると、いのししが出てきて、お姫さまを食べようと思いました。けれども、お姫さまがあまりに清らかな様子なので、

「おまえのようなきれいなお姫さまを、おれはどうすることもできない。さあ、御殿へ帰れ」といって、お姫さまを背せ中なかに乗せて、あつという間に御殿に連れもどしました。

母親は、たいへん悔くやしがりました。そして七日たつと、お姫さまを桶おけに閉とじこめて、庭のすみに穴あなを掘うって埋うめました。

やがて、お殿さまが御殿に帰ってきました。

夕方、お殿さまが縁側えんがわに出てふと見ると、庭のすみが明るく光あっています。ふしぎなことだと思つて、家来にそのあたりを掘ほらせてみると、カツンと鍬くわの先に当たるものがありました。それは大きな桶おけでした。そこで、掘り出してふたを取とってみると、なんと、お姫さまが真まつ青な顔をして入いっていました。そこで大騒おおいさわぎになつて、みなで介抱かいほうしました。お殿さまは、

「どうしてこんな目にあつたのだ」とたずねました。お姫さまは、母親のことは一言もいわないで、

「いつか知らない間にあんな所に入れられていたのです」と答えました。お殿さまはおかしなことだと思いましたが、お姫さまが元気になったので安心しました。

母親は、どうしてもこうしても、いつもお姫さまが無事に助かるので、いよいよ腹を立てました。そこで、またお殿さまが留守の間に、山から桑の大木を切つて来させ、それで、がんじょうな丸太船を作らせました。そして、お姫さまを船に乗せて、しっかりとふたをし、海へ投げこんでしまいました。

お姫さまを乗せた船は、広い海を流されていきました。今度は、だれも助けしてくれる者はなく、何年も何年も波にゆられて海に浮かんでいました。

さて、あるところに、年とつた漁師が妻とふたりで住んでいました。漁師は、毎日海へ出て魚を釣つて暮らしていました。

ある日のこと、漁師はいつものように釣りに行きましたが、その日に限つて魚がちつとも釣れませんでした。どうしたわけかと思っていると、夕方ごろ、船のような丸太のような、おかしな物が浜に流れ着きました。見ると、ふたがついていたので、漁師は、苦労して開けてみました。すると、ひとりのお姫さまが、まっさおな顔をして眠っていました。漁師は、おどろいて、あわてて家に連れて帰りました。妻とふたりであれこれ介抱するうちに、お姫さまは起きて話ができるようになりました。漁師が、

「どうしてこんな目にあつたんだ」とたずねると、お姫さまは、やはり母親のことは一言もいわないで、

「いつか知らない間にあんな所に入れられていたのです」と答えました。

漁師と妻は、子どもがなくて寂しかったので、お姫さまを大切に育てようと思いましたが。ところが、じきに、お姫さまは、ぼっくり死んでしまいました。ふたりは、悲しくて、お姫さまを棺桶に入れたままお墓に埋めることができませんでした。奥の部屋に棺桶を置いて、毎日、ふたを開けては、お姫さまをながめて泣きました。

ある日、ふたりがいつものように、棺桶のふたを開けてみると、お姫さまはいなくて、かわりに細かい黒い虫がいっぱい動いていました。ふたりは、

「姫の身代わりに、せめてこの虫でも飼おうか」といって、桑の葉をつんできて虫にやりました。虫はだんだん大きくなりましたが、七日目になると、みなじつとして動かなくなりしました。漁師と妻が心配していると、ふたりの夢にお姫さまが現れて、いいました。

「その虫は蚕というものです。葉っぱを食べなくなっても心配することはありません。じつは、わたしは、生きていたころ、継母まははに鷹の山へ捨てられて、食べるものが何もなかったのです、こうして蚕になってからも食べないのです。でも、一日一晩ひしばんたてば、またいくらでも食べて大きくなります」

あくる朝、ふたりが、蚕に桑の葉をやると、なるほど、ずんずん食べて大きくなりました。そして、青白くすきとおったきれいな虫になりました。ところが、七日目になると、また、蚕は動かなくなりました。そして、また夢にお姫さまが現れて、いいました。

「心配することはありません。わたしは、鷹の山へ捨てられてから七日目に、今度はいのししの山にすてられました。やはり食べるものが何もなかったのです、蚕になってからも食べないのです。でも、一日一晩たてば、またいくらでも食べて大きくなります」

あくる朝、ふたりが、蚕に桑の葉をやると、また、ずんずん食べて大きくなりました。ところが、七日目になると、また、蚕は動かなくなりました。そして、夢にお姫さまが現れて、いいました。

「わたしは、いのししの山へ捨てられてから七日目に、桶に入れられて庭に埋められました。やはり食べるものが何もなかったのです、蚕になってからも食べないのです。でも、一日一晩たてば、またいくらでも食べて大きくなります」

あくる朝、ふたりが、蚕に桑の葉をやると、また、ずんずん食べて大きくなりました。七日目になると、また、蚕は動かなくなりました。ふたりが心配していると、夢にお姫さまが現れて、今度は船に入れられて海に流されたからだといいました。そして、

「けれども、今度はこれつきりです。七日目には一匹一匹の虫がみなまゆというものをかけます。まゆをそのまま置けばひとつひとつのまゆから、蝶ちょうが一匹ずつ出てきます。その蝶がまた卵を産んで、末永くつ尽きることはありません。でも、蝶にするまゆは少しだけ残して、あとは、煮にて糸をとれば絹きぬになって、どんなみごとな布ぬいでも織おることができます」といいました。

漁師と妻は、お姫さまに教えられたとおりに、たくさんなの絹糸をとりました。

今でも、蚕が七日目ごとに四回眠るのを、鷹たかの並び、いのししの並び、庭の並び、船の並びというのだそうです。

おしまい

村上郁再話

資料『甲斐昔話集』土橋里木／郷土研究社